様式Ｃ－１９

# 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 6 日現在

機関番号：34315
研究種目：基盤研究（Ｂ）
研究期間：2008～2012
課題番号：20320007
研究課題名（和文）　多極化する現象学の新世代拠点形成と連動した「間文化現象学」の研究

研究課題名（英文）　Research in "Intercultural Phenomenology" in coordination with the creation of a research hub for younger scholars in an age of multipolarization

研究代表者
谷　徹（TANI TORU）
立命館大学・文学部・教授
研究者番号：40188371

研究成果の概要（和文）：
諸文化は、研究者自身が自文化に属するかぎり、外部から「客観的に」捉えられない。だが、自文化自体が純粋でなく異文化とのハイブリッドであり、両者の「間」が問題になる。この「間」で自文化が異文化に開き／閉じることで、「間」自体が脈動・開閉する。この運動を、新世代の研究者の拠点を形成しつつ、「言語」「離合（遭遇）」「共存」「精神」「時間」の５側面から現象学的に問い、文化が間文化的に「文化する」条件を解明した。

研究成果の概要（英文）：
Cultures cannot be “objectively” conceived from “outside”, precisely because the researcher himself belongs to a specific culture of his own. However, one’s “own culture” is itself never pure, but a hybrid. Thus, what is “between” one’s own culture and foreign cultures becomes the central problem. In this “between-ness”, a culture opens/closes itself to foreign cultures; therefore, the “between” itself pulsates. This project provided a hub where younger researchers could work, and phenomenological investigations into the pulsating movement of interculturality were conducted from the five perspectives of “language”, “encounter”, “coexistence”, “spirit”, and “time”, thereby clarifying some important conditions for the intercultural “culturing” of cultures.

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合　計 |
|---|---|---|---|
| 2008 年度 | 3,600,000 | 1,080,000 | 4,680,000 |
| 2009 年度 | 3,000,000 | 900,000 | 3,900,000 |
| 2010 年度 | 2,500,000 | 750,000 | 3,250,000 |
| 2011 年度 | 3,000,000 | 900,000 | 3,900,000 |
| 2012 年度 | 2,300,000 | 690,000 | 2,990,000 |
| 総　計 | 14,400,000 | 4,320,000 | 18,720,000 |

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学、哲学・倫理学
キーワード：現象学、間文化性、言語、遭遇、共存、精神、時間

１．研究開始当初の背景

(1)本研究のメンバーの一部は、それまで「暴力」の研究を行ってきた。その展開のなかで個人と個人の問題を越えて、文化と文化の関係（間文化性）の問題が浮上してきた。間文化性は、同質的な類であるよりも、差異を生み出しつつ互いに関係しあう人間の基本にあると考えられた。

(2)文化は、物理現象でも生物学的現象でもなく、人間の意味的現象である。人間はそれぞれ文化に属し、文化に強く影響を受けながら、文化を形成している。こうした、意味的現象を意味形成運動の内部から問うために、現象学が必要とされた。

(3)しかし、そのためには、現象学そのものの変革が必要になった。そこで新たな現象学としての間文化現象学の樹立・確立がめざされた。

２．研究の目的

(1)ある文化が異文化と遭遇するときに生じる諸現象を、研究者自身の文化内属性を視野に入れつつ、「意味」的に解明する。

(2)そのための方法として、間文化現象学という新たな方法を樹立する。これは、自文化や異文化をそれぞれ観察するのではく、むしろ、「間」という場から自文化と異文化を捉えるために現象学を変革することを意味する。

(3)研究の遂行・継続・新展開のために新世代の研究者の拠点を形成する。間世代性は、間文化性の基本構造であり、研究者自身がそこに内属しつつ、新たな間世代性を形成する。

３．研究の方法

(1)５つの重点研究領域を設定する。

(2)重点研究領域に対応して、異文化に属する先端的研究者との共同作業（シンポジウム、ワークショップ、講演会、セミナーなど）をつうじて、間文化的現象に光を当てる。

(3)その上で、これらの研究の総合をはかる。

(4)研究の遂行・継続・新展開のために新世代研究者の拠点を形成する。拠点は、交流の場を形成するとともに、継続的な研究会活動を遂行する。

４．研究成果

５つの重点研究領域にもとづき、５回の中心的な国際シンポジウム（ただし第３回と第４回は震災の影響により合同）を開催した。これ以外に――間文化現象学研究センターと連携・協力したものも含めて記す――個別のシンポジウム（２回）、講演会（１１回）、ワークショップ（４回）、セミナー（１回）、討論会（１回）などを開催した。研究は、これらを軸にして展開された。以下、それぞれの重点研究領域に関して例示的に記す。

(1)「言語」については、たとえば翻訳は、原文の外国語への単純な置き換えによる伝達でなく、むしろ間文化的な意味の生成であることが示された。

(2)「遭遇」については、たとえば、ヨーロッパ中心主義（これはヨーロッパだけの事柄ではなく、「自文化」のもつ構造的問題である）による異文化の捉え方が分析された。さらにまた、（ひとつの国内における）異文化との遭遇が事実上の内戦につながった事例が、当事国の研究者によって現象学的に分析された。

(3)「共存」については、ひとつの文化的共同体そのものに含まれる排除／融合と文化形成、そして、それが他の共同体と関係するときに複雑化する諸問題が明らかにされた。

(4)「精神」については、ある文化内の問題だけでなく、間文化性を背景にした精神医学的な諸問題が示された。

(5)「時間」については、たとえば移民とその出身文化の歴史的時間の差異の発生構造などが分析された。

(6)これらの５つの重点研究領域の研究視角から、自文化と異文化の「間」の動態構造――これは外部観察的な視点からでは解明されない――が明らかにされた。以下に成果を、全体にかなりの程度まで共通する内容を中心にして、概括する。

異文化は、自文化にとって単純な「外部」であるのではなく、さりとて単純な「内部」に吸収されるわけでもなく、むしろ、「間」においてこそ、自文化と「対」となって、そのつどのそれとして「現れる」（現象する）のであり、この現れ・現象の如何が、自文化――これ自体も異文化に対するものとして現れる――の（時に暴力的な、時に形成的な）関係性を生み出すことになる。こうした「間」を無視した「文化」はありえない。「文化」は「間」の「現象」であり、その意味で、それ自体として、間文化的な現象である。これまで「文化」という言葉（今では culture の訳語と化しているが）は多様に使われ、多様に称揚・批判されてきたが、今回の研究のなかで上記のような動態構造が示されてきた。そこで、この言葉を動詞として使うこともできるだろう。すなわち、文化は、名詞的に存在しているのではなく、むしろ、「間」で「文化する」。

われわれの現象学的な研究そのものも、この間文化的な動態構造に対して、外挿的な関係を取ることはできず、むしろ、それにあらかじめ組み込まれており、それに「応答する」という仕方で展開する。

このような視座、そしてこのように析出され洗練されてきた「間」、「応答する」、「文化する」などの諸概念は、研究展開の成果であるとともに、今後の研究のためのいわば発見的な機能をもつことにもなるだろう。これまでの成果とこれからの発見は不可分である。このことは、多くの研究についても言えるが、しかし、とりわけ間文化性を内側から研究する間文化現象学にとっては重要である。

(7)上記は概括であるが、詳細な成果のか

なりの部分はすでにさまざまな形で刊行されており、なかでも『現代思想』（青土社）で組まれた間文化現象学の特集（平成 22 年：2010 年）は、読者に少なくとも一定のインパクトを与えたと思われる。

また、初年度から三年間の成果については報告書が作成された。その他の研究展開、そして、総合的な成果については、今後さらに活字化される。

(8)研究成果は、メンバーが国内・国外の学会で発表するという形でも発信された。そのうちひとつは、日本現象学・社会科学会でのワークショップという形をとった。本プロジェクトはこうした発信に寄与した。

(9)立命館大学に「間文化現象学研究センター」が設立された（平成 21 年：2009 年）。これを拠点として、海外の研究センターとの研究の連携が行われた。とりわけ香港、プラハ、コペンハーゲンとは関係がより緊密になり、さらに、高雄（台湾）やウィーンやブルゴーニュをはじめとして新たな連携関係が確立された。

さらに、この拠点に海外の数人の若手研究者を受け入れることもできた。これは直接的な成果ではないが、しかし、将来の研究展開に資するだろう。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 119 件）


① Toru Tani, Trauma, Civilization, Reproduction, *Investigaciones Fenomenologicas*, 査読無, 9, 2012, 289-306
② 青柳雅文、危機の中の安穏：危機を語るということ、文明と哲学、査読無、4 号、2012、154-168
③村井則夫、田辺元のバロック哲学 ― 絶対媒介の力学性と象徴性、思想、査読無、1 月号、2011 年、117-143
④川瀬雅也、生命と文化――アンリとベルクソンの近さと遠さ、ミシェル・アンリ研究、査読有、1 号、2011 年、59-76
⑤和田渡、現象学の起点と展開―フッサールとアンリ、同志社哲学年報、査読無、34 号、2011 年、45-55
⑥加國尚志、「あいだ」の共有　生命の現象学と臨床哲学　ヴァイツゼッカー、メルロ＝ポンティ、木村敏、現代思想、査読無、38-12 号、2010 年、94-109
⑦廣瀬浩司、諸文化を横断する戦闘的な真理――メルロ=ポンティ「制度化」概念と「間文化現象学」、現代思想、査読無、38-7 号、2010 年、186-197
⑧ Daisuke Kamei, The Possibility of a "Linguistic Community", *PHENOMENOLOGY 2010. Selected Essays from Asia and Pacific*, 査読無、1 号、2010 年、63-80
⑨亀井大輔、デリダの翻訳論、文明と哲学、査読無、3 号、2010 年、150-160
⑩田口茂、〈異和感〉が覚起する〈理性〉――間文化性をめぐる現象学的試論、現代思想、査読無、38-7、2010 年、86-99
⑪谷徹、現象学と間文化性、現代思想、査読無、37-16 号、2009 年、126-141
⑫川瀬雅也、時間性と〈文化の危機〉――アンリからメルロ＝ポンティを見る――、現象学年報、査読無、25 号、2009 年、49-58
⑬谷徹、危機と／の意味、文明と哲学、査読無、1 号、2008 年、102-116
⑭Koji Hirose, La fonction heuristique de la notion philosophique : sur la traduction de la notion de chair en japonais, *Chiasmi international*, 査読無、10, 2008, 129-137
⑮古荘真敬、「もののあはれ」と「自己触発」、日本語の哲学、査読無、123 巻/第 795 号、2008 年、108-124


〔学会発表〕（計 136 件）


① Toru Tani, Die Phaenomenologisierung der Kultur, Philosophische Konzeptionen von Raum und Selbst – Ein deutsch-japanisches Symposium, 2013 年 3 月 23 日, 関西学院大学（兵庫県）
②Ichiro Yamaguchi, Technik und Menschenwuerde in der Philosophie nach Fukushima, Forum Scientiarum, 2012 年 6 月 9 日, テュービンゲン（ドイツ）
③Shinji Hamauzu, Watsujis „Ethik“ als Anthropologie. Zur Rezeption deutscher Philosophie in Japan, ハイデルベルク大学哲学研究所主催講演会, 2012 年 7 月 17 日, ハイデルベルク（ドイツ）
④廣瀬浩司、自然と『文化』の萌芽――メルロ＝ポンティの『自然』講義から、日本現象学・社会科学会第 29 回年次大会シンポジウム２「社会性への間文化現象学的アプローチ」、日本現象学・社会科学会、2012 年 12 月 2 日、神戸大学（兵庫県）
⑤青柳雅文、社会の間文化的ダイナミズム――生成と破壊、遭遇と排除、日本現象学・社会科学会第 29 回年次大会シンポジウム２「社会性への間文化現象学的アプローチ」、日本現象学・社会科学会、2012 年 12 月 2 日、神戸大学（兵庫県）
⑥小林琢自、社会団体の「構成」――間文化現象学の視点から、日本現象学・社会科学会第 29 回年次大会シンポジウム２「社会性への間文化現象学的アプローチ」、日本現象学・社会科学会、2012 年 12 月 2 日、神戸大学（兵庫県）

⑦Yuichi Sato, The Way of the Reduction via Anthropology ― Husserl and Levy-Bruhl, Merleau-Ponty and Levi-Strauss ―, 第 5 回間文化現象学シンポジウム、2013 年 3 月 13 日、立命館大学（京都府）
⑧ Tetsuya Sakakibara, Ich und Du bei Nishida und Heidegger, Heidegger-Nishida-Symposium 2011, 2011 年 9 月 10 日, メスキルヒ（ドイツ）
⑨Shigeru Taguchi, Critique of Evidence in Science and Phenomenology: Layers of First-Person Givenness, PHENOMENOLOGY AS A BRIDGE BETWEEN ASIA AND THE WEST CONFERENCE, 2011 年 5 月 23 日, セントルイス（アメリカ）
⑩小林琢自、尾高朝雄と超越論的現象学――文化的対象性の現象学的考察――、間文化現象学ワークショップ、2012 年 3 月 10 日、立命館大学（京都府）
⑪村上靖彦、誰かがそこから呼びかけてくる場所について～がん緩和ケア専門看護師 C さんへのインタビューから、間文化現象学ワークショップ、2012 年 3 月 10 日、立命館大学（京都府）
⑫廣瀬浩司、「野生の精神」と間文化性――メルロ=ポンティにおける、経験のエッジと目的論――、間文化現象学ワークショップ、2012 年 3 月 10 日、立命館大学（京都府）
⑬吉川孝、共感と価値――M・シェーラーにおけるケアの倫理、間文化現象学ワークショップ、2012 年 3 月 10 日、立命館大学（京都府）
⑭古荘真敬、ひとりあること／共にあること――和辻とハイデガーをめぐる試論――、間文化現象学ワークショップ、2012 年 3 月 10 日、立命館大学（京都府）
⑮Shunichi Noma, Selfness of the Instant, 第 3 回＆第 4 回間文化現象学シンポジウム, 2011 年 11 月 3 日, 立命館大学（京都府）
⑯ Norio Murai, Tanabe's Philosophy of Baroque: 'Logic of Species' and 'Co-existence', 第 3 回＆第 4 回間文化現象学シンポジウム, 2011 年 11 月 3 日, 立命館大学（京都府）
⑰ Takuji Kobayashi, The Rational Construction and the Life-World on Husserl's Phenomenology, The Organization of Phenomenological Organizations, OPO IV World Conference on Phenomenology, 2011 年 9 月 20 日、セゴヴィア（スペイン）
⑱田口茂、媒介とそれを動かすもの――西田・田辺論争と哲学的「視」の問題、間文化現象学研究会ワークショップ、2011 年 7 月 2 日、立命館大学（京都府）
⑲Toru Tani, A Phenomenological Approach to Interculturality, The 4th International Conference of PEACE (Phenomenology for East Asian CirclE), 2010 年 12 月 9 日、高雄（台湾）
⑳Toru Tani, The Uniqueness of the World, Intercultural Philosophy and Chinese Medicine, 2009 年 5 月 9 日, ウィーン（オーストリア）
Ichiro Yamaguchi, Die Andersheit des Anderen in der Ethik der interkulturellen Phaenomenologie, Gesellschaft fuer interkulturelle Philosophie, 2009 年 7 月 25 日, ヴェルツブルク（ドイツ）
Masafumi Aoyagi, Administration and Divergence, 第 2 回間文化現象学シンポジウム, 2010 年 1 月 24 日, 立命館大学（京都府）
Shigeru Taguchi, Interkulturelle Vernunft. Eine Vorstudie im Anschluss an Husserl, 第 2 回間文化現象学シンポジウム, 2010 年 1 月 24 日, 立命館大学（京都府）
Toru Tani, Kultur-Leben-Welt: Phaenomenologische Grundbegriffe zwischen Ost und West, Gesellschaft fuer interkulturelle Philosophie, 2009 年 7 月 25 日、ヴェルツブルク（ドイツ）
Takashi Kakuni, Now and Here, I am There - The Theory of the Body and the space in Maurice Merleau-Ponty and Nishida Kitaro, Second Architecture and Phenomenology Conference, 2009 年 6 月 27 日, 京都精華大学（京都府）
Daisuke Kamei, The Possibility of a "Linguistic Community", 第 1 回間文化現象学シンポジウム, 2009 年 2 月 21 日, 立命館大学（京都府）
Daisuke Kanda, Language and Inducement, 第 1 回間文化現象学シンポジウム, 2009 年 2 月 21 日, 立命館大学（京都府）
Shigeru Taguchi, Reduction to 'Trace': Phenomenological Interpretation of Japanese Pure Land Buddhism, Organization of Phenomenological Organizations, OPO III, 2008 年 12 月 19 日 香港（中国）
Toru Tani, Sense as Sending, Organization of Phenomenological Organizations, OPO III, 2008 年 12 月 18 日, 香港（中国）
Shigeru Taguchi, From Henological Reduction to Phenomenology of 'Name' – Interpretation of Japanese Pure Land Thought, International Conference *Envisioning Japanese and Chinese Philosophical Potentials in the 21st Century*, 2008 年 12 月 14 日, 香港（中国）
Tetsuya Sakakibara, Phenomenology in a different voice, The XXIIth World Congress of Philosophy, 2008 年 8 月 3 日, ソウル（韓国）

廣瀬浩司、メルロ＝ポンティの「制度化」概念とその射程、多文化精神医学会学術大会、2009 年 3 月 27 日、川崎市産業振興会館（神奈川県）
Takuji Kobayashi, The Teleology of Reason and the Interpretation of "History" - On the Concept of Motivation, E.Husserl and A.Schutz -, 4th World Congress of Phenomenology, “The Phenomenology and Existentialism of the Twentieth Century”, 2008 年 8 月 19 日, クラクフ（ポーランド）

〔図書〕（計 45 件）
①田口茂（野家啓一監修、林永強・張政遠編）、世界思想社、日本哲学の多様性：２１世紀の新たな対話をめざして、2012 年、44-63
② Masaya KAWASE (Stephan Graetzel, Frederic Seyler 編), Verlag Karl Alber, *Sein, Existenz, Leben : Michel Henry und Martin Heidegger*, 2012 年, 191-218
③村上靖彦、河出書房新社、レヴィナス　壊れ物としての人間、2012 年、246
④Toru Tani（Yoshihiro Nitta, Toru Tani 編）, Koenigshausen & Neumann, *Aufnahme und Antwort, Phaenomenologie in Japan Bd.1*, 2011 年, 97-117
⑤Norio Murai（Yoshihiro Nitta, Toru Tani 編）, Koenigshausen & Neumann, *Aufnahme und Antwort, Phaenomenologie in Japan Bd.1*, 2011 年, 62-77
⑥吉川孝、知泉書館、フッサールの倫理学生き方の探究、2011 年、262
⑦村上靖彦、講談社、治癒の現象学、2011 年、203
⑧村上靖彦、青土社、傷と再生の現象学、2011 年、300
⑨川瀬雅也、勁草書房、経験のアルケオロジー――現象学と生命の哲学、2010 年、358
⑩Toru Tani（Lothar Knatz, Norbert Casper, Tanehisa Otabe 編）, LIT Verlag Berlin, *Studien zur Weltgeschichte des Denkens, Denktraditionen – neu entdeckt, Bd. 2, Kulturelle Identititaet und Selbstbild, Aufklaerung und Moderne in Japan und Deutschland*, 2011 年, 51-65
⑪Shinji Hamauzu, Koenigshausen & Neumann, *Identity and Alterity — Phenomenology and Cultural Traditions*, 2011 年, 99-112
⑫田口茂、法政大学出版局、フッサールにおける〈原自我〉の問題――自己の自明な〈近さ〉への問い、2010 年、400
⑬榊原哲也、東京大学出版会、フッサール現象学の生成――方法の成立と展開――、2009 年、584

６．研究組織
(1)研究代表者
谷　徹（TANI TORU）
立命館大学・文学部・教授
研究者番号：40188371

(2)研究分担者
加國　尚志（KAKUNI TAKASHI）
立命館大学・文学部・教授
研究者番号：90351311

日下部　吉信（KUSAKABE YOSHINOBU）
立命館大学・文学部・教授
研究者番号：90131309

服部　健二（HATTORI KENJI）
立命館大学・文学部・教授
研究者番号：40148383

北尾　宏之（KITAO HIROYUKI）
立命館大学・文学部・教授
研究者番号：00211194

山口　一郎（YAMAGUCHI ICHIRO）
東洋大学・文学部・教授
研究者番号：20287551

和田　渡（WADA WATARU）
阪南大学・経済学部・教授
研究者番号：80210988

浜渦　辰二（HAMAUZU SHINJI）
大阪大学・文学研究科・教授
研究者番号：70218527

榊原　哲也（SAKAKIBARA TETSUYA）
東京大学・人文社会系研究科・教授
研究者番号：20205727

村井　則夫（MURAI NORIO）
明星大学・人文学部・准教授
研究者番号：20366917

廣瀬　浩司（HIROSE KOJI）
筑波大学・人文社会科学研究科・准教授
研究者番号：90262089

野間　俊一（NOMA SHUNICHI）
京都大学・医学研究科・講師
研究者番号：40314190

田口　茂（TAGUCHI SHIGERU）
北海道大学・文学研究科・准教授
研究者番号：50287950

古荘　真敬（FURUSHO MASATAKA）
東京大学・総合文化研究科・准教授
研究者番号：20346571

川瀬　雅也（KAWASE MASAYA）
佐世保工業高等専門学校・一般教育・准教授
研究者番号：30390537

村上　靖彦（MURAKAMI YASUHIKO）
大阪大学・人間科学研究科・准教授
研究者番号：30328679

亀井　大輔（KAMEI DAISUKE）
立命館大学・文学部・助教
研究者番号：80469098

吉川　孝（YOSHIKAWA TAKASHI）
高知県立大学・文化学部・講師
研究者番号：20453219

佐藤　勇一（SATO YUICHI）
立命館大学・文学部・講師
研究者番号：40469101

神田　大輔（KANDA DAISUKE）
立命館大学・文学部・講師
研究者番号：30469100

青柳　雅文（AOYAGI MASAFUMI）
立命館大学・文学部・講師
研究者番号：90469099

小林　琢自（KOBAYASHI TAKUJI）
立命館大学・文学部・講師
研究者番号：60518091

(3)連携研究者
坂部　恵（SAKABE MEGUMI）
立命館大学・文学部・講師
研究者番号：30012503